

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



小治田之真清水

池田 誠一

【6】名古屋・築城…金の鯨の意味

1 誤解された築城

名古屋城の築城の話はよく知られています。ところが戦後になるまで、意外な誤解が拡がっていました。たとえば、

「天守閣は加藤清正がつくった」

「城は1610年に完成した」…などと。

このうち前者については、同時代資料の『張州府志』に始まり江戸時代の文献にいくつもその記述があります。また後者についても、権威ある戦前の『名古屋市史』がこの説を採り、通説になっていたのです。

しかし、後で説明するように清正が造ったのは石垣(天守台)まででしょう。また1612年3月には、天守は未だ工事中だったという記録があるので。このように、有力な史料すら見解が分かれる名古屋築城。今回は築城にまつわる疑問を考えつつ、忘れられそうなくつつかの物語を拾ってみたいと思います。

2 名古屋・築城

(1) 築城の経過

名古屋城の築城が動き始めたのは1610年の1月になります。駿府に集められた大名に対して、名古屋築城の助役が命じられました。いわゆる天下普請です。西国を中心に17大名。

3月に追加されて、計20大名になりました。

閏2月、命をうけて各大名は一斉に動き出しました。家来や職人、諸資材の調達をし、名古屋に向かわせました。現地に縄張りの杭が打たれたのは5月。それからの普請の記録は大略次のようになっています。

- ① 5月5日 縄張りができる
- ② 5月15日 分担が決まる
- ③ 6月3日 根石が置かれる
- ④ 6月13日 石垣が出来る
- ⑤ 8月27日 天守が出来る
- ⑥ 年内に ことごとく成就する

この③から⑤を、『名古屋市史』では、「6月3日、根石を置き、13日、本丸石垣成就し、8月27日、天守の工成り、…」と記しています(文献①)。素直に見ると、石垣は10日で組み上り、2ヶ月半で5層の天守が出来たことになるのです。

この名古屋市史が採った通説に疑義をはさんだのは名工大の城戸教授でした(文献③)。市史の解釈は技術的に不可能だとし、②は最初に根石が置かれた時、③は根石が全て置かれた時、いわば城の形が概ねできた時だったと。また④は、清正は石垣しか相当しておらず、この時が天守の石垣が出来たときではないかと。⑥のことごとく成就したのも土木工事だったのでしょう。

城の工事は大きく、普請と呼ぶ土木工事と作事という建築工事に分かれていました。こ

の混同が天守閣の完成時期の誤解を生んだようです。記録を追うと作事は1611年から始められているのです。翌年3月に家康が視察したときは未だ3層目でした。決定的なことは分かりませんが1612年末には天守も完成していたと推定されています。

(2)城郭の計画

次に、築城された城の縄張り(計画)をみてみましょう。曲輪としては本丸を北に置き、東から西へ、二の丸、西の丸、深井之丸(御深井丸)が取り囲みました。後に南側に三の丸が追加され、いわゆる梯郭式と呼ばれる

形になりました(図1)。本丸が名古屋台地の西北角に置かれたため、西側の御深井丸は湿地帯の中の築造になり、西国大名に浪費を強いることになったのです。城の形はシンプルな箱型の組み合わせで、姫路城のような細工はありません。天下に公開した築城のため、それでよかったのでしょう。

一方で、この城にはきわめて難攻な工夫がありました。それは本丸入口の馬出しです。堀の内側は「枅形」、外側は「馬出し」で防備され、周りを「多聞櫓」が囲いました(図2)。その外側は深い「堀」が取り囲んでいます。侵入しようとする、何重もの屈曲を余儀なくされ、その間、城方に何度も背を向けることになるのです。この曲輪になった馬出しは、南側の大手口その他、東側の搦手口にも設けられました。これなどは構造が敵方に漏れることの方が効果があったといえます。

(3)天守計画の変更

ところが、1つだけ隠されたのではないかと疑われる場所があります。天守です。天守は、当初計画から何回か変更されているようです。今日では5次にまとめられており、天守部分については、

- ①天守の西側の堀の中に小さな櫓がある
- ②櫓、堀がなくなり角に枅形の門ができる

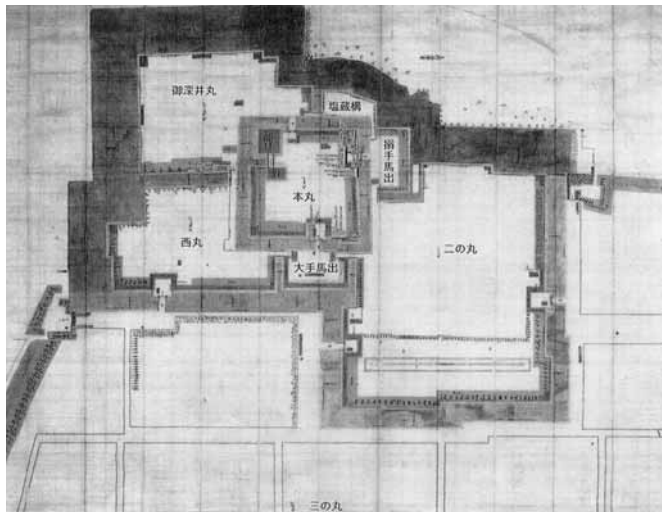


図1 名古屋城の城郭部分(小和田、三浦監『よみがえる名古屋城』)

- ③枅形が止められ、地続きのままにされる
- ④堀が復活し、不明門の土橋が出来る
- ⑤小天守の入口などが変わる、となっています(図3)。

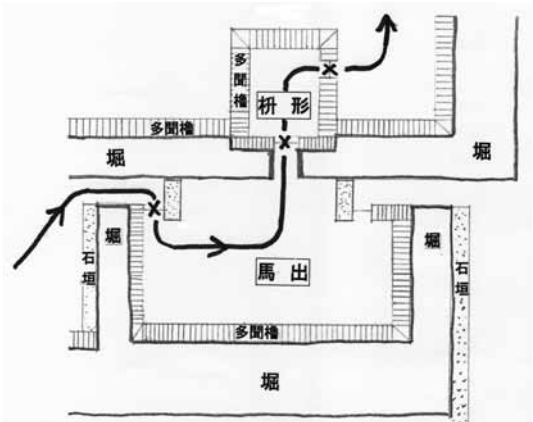


図2 本丸、大手付近の「枅型」と「馬出し」

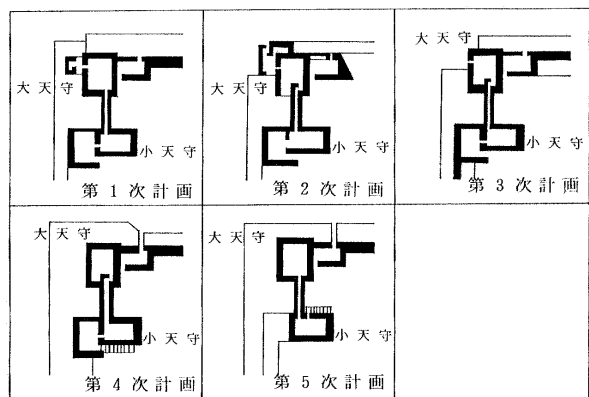


図3 名古屋城天守付近の計画変更の概要(文献④)

このような防御機能の強化と想われない計画変更がなぜ行われたのでしょうか。変更の時期も推定されており、③が助役の大名に分担を示した頃です。清正はこの計画によって石垣を造ったこととなります。今も石垣西の上部に入口の跡が残るのはこのためでしょうか。この経過を石の刻印から追究したのが高田氏です(文献④)。氏は、④の西北部石垣は普請の諸大名が帰国してから施工されたこと、⑤の小天守入口の改変は翌年幕府が行ったことを突き止めました。その上で結論として、これらの計画変更は、諸大名からの目をくらませるための策ではなかったかと推測しています。敵方に城を作らせるということには、難しい問題もあったといえそうです。

3 紀行 城郭をあるく

… 消えた馬出しと天守の改変 …

以上のように、名古屋城には天下普請ゆえのいくつかの工夫がありました。今回はそれらの跡を追いつつ、名古屋城の城郭部を歩いてみたいと思います。



二の丸庭園内にある「那古野城跡」の石碑



東からみた「大手馬出し」の跡。左の石垣の間は堀。石垣のむこうにも道をふさぐように石垣があった

〈馬出し〉

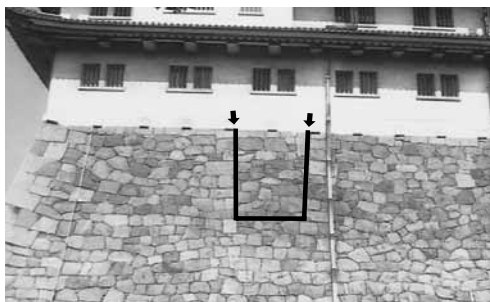
地下鉄市役所駅の北改札口を出ます。突き当たり左の7番出口が名古屋城への道になります。高麗門風の出口を出て北に進みます。少し行き、左側の二の丸の東門跡を入ります。枡形になっており道は屈曲します。枡形は当時築城された城では一般的になっていました。通り抜けると有料区域の東門です。

入ってすぐの二の丸庭園の入口の中に「那古野城跡」の石碑があります。城内で唯一の古城の史跡のようです。まっすぐ西に進むと、右、左と堀が現れます。ここからが大手の「馬出し」です。左側の石垣の少し向こうには、行く手を塞ぐように石垣があったはずですが取り壊されています。攻める時は、この細い通路から左へその石垣を迂回する間、右の多聞櫓から鉄砲で攻撃されることになったのです。その向こうの馬出しの堀なども残念ながら明治時代に埋められてしまっています。

進むと本丸の南(表)門です。本丸の中は、今は本丸御殿の工事中です。枡形を通過して工事区間を抜け、天守と小天守を見ながら右手



名古屋城天守。石垣が20メートルほどある



石垣の上部にのこるU型をした入口の跡(正面)

奥に進みます。今は開かれている不明門の枡形を通ると土橋です。左側には天守の石垣が迫ります。

〈天守改変〉

土橋を渡った先は御深井丸です。左に聳える天守は、石垣の高さを加えると56^尺。18階建てのビルに相当します。



名城・名古屋城・天守閣



正門北に残る榎の木。樹齢600年という

この天守の西北角がカモフラージュで工夫されたとされる一角です。西に廻ると石垣の上の方にU型に入口の跡とされるところが望めます。当初は西側の堀の中に櫓が計画されていました。次にここの部分の堀がやめられ、枡形の入口ができました。その後その枡形は中止され、天守は深井丸と陸続きになりました。この段階で工事が行われたようで、堀の計画がないのに、清正はなぜ今在るように深くから石を積上げたのでしょうか。謎に満ちた天守西北部。見上げる天守は何事もなかったかのように静かですが、U型に残された石の区画が謎の存在を提起しています。

御深井丸は、今は本丸御殿の作業場になっています。堀に沿って南に進み、狭い鶯の首を抜けて西の丸に出ます。この辺り

から見上げる天守閣は名城の名にふさわしいものです。入口の近くに榎(かや)の木の太木があります。樹齢600年。築城前から残る木で、ここまでは台地があったことを証明しています。南に今の正門(榎多門)を出ます。橋を渡り左に堀に沿って歩くと原形の残る大手二之門に出ます。こうやって歩いてみると、実感として如何に大きな城だったかということが分かります。南に進み、交差点を左に歩くと出発点の地下鉄出口です。

4 縄張 宜しからず

名古屋城の縄張り(計画)は、江戸時代の軍学者には評判が悪かったようです。全てが分かりやすい直線で構成され、敵を欺く屈曲もわずかです。「縄張宜しからず」と評されることもやむをえなかったかもしれません。

しかし、実はこの城が狙いとしたところは、そのような要害性にはありませんでした。名古屋城は、戦いのための城ではなく、戦いを起こさないようにするための城だったのです。そのためには、まず大きいことが必要でした。当時大きかった姫路城や大坂城と比較すれば一目瞭然です(図4)。さらに、それを人心に納得させることが必要でした。そこで目を付けられたのが金の鯨でしょう。この鯨を見た当時の人は、もう、「徳川の時代」が来たことを疑わなかったに違いありません。それこそが、大名古屋城を造り上げた家康の心だったのではないのでしょうか。

〈主な参考文献〉

- ①名古屋市『名古屋市史・政治編1』(1915、名古屋市)
- ②名古屋市編『名古屋城史』(1959、名古屋市)
- ③城戸久『名古屋城』(1943、彰国社)
- ④高田祐吉『名古屋城』

(2001、文化財叢書95、市教育委員会)

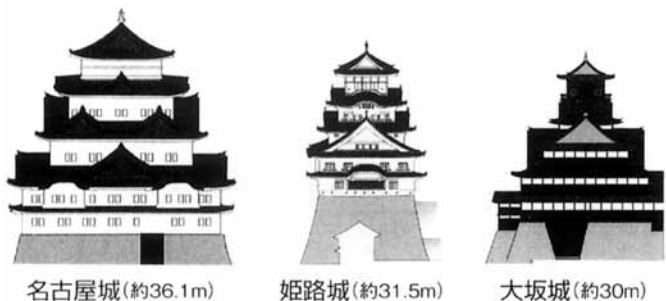


図4 姫路城、大坂城(豊臣)との大きさの比較(新創社『名古屋時代MAP』)